

熊本国際建築展 くまもとアートポリス'96

阿 蘇

まちづくり展

ASO TOWNPLANNING EXHIBITION

KUMAMOTO
INTERNATIONAL
EXHIBITION
OF
ARCHITECTURE
KUMAMOTO
ARTPOLIS '96

K·A·P



O N T E N T S

阿蘇

KUMAMOTO INTERNATIONAL EXHIBITION OF ARCHITECTURE

KUMAMOTO ARTPOLIS '96

阿蘇まちづくり展概要	1
プログラム	2
オープニングイベント	3
まちづくりシンポジウム	7
◆講演 「多自然居住の時代を迎えて～美しさをキーワードに」 講師：宮口侗昶（早稲田大学教授）	8
◆座談会	18
まちづくり体験オリエンテーリング大会	31
環境とアートポリス展	37
阿蘇町農村公園アート・プロジェクトコンペティション	41

概要

熊本の観光の代名詞ともいえる雄大な阿蘇の五岳を間近にひかえ、北に外輪山を望む阿蘇町。'90年、国の補助事業である「地域に根ざした住まいづくり」の対象町となったことで、町民も交えたまちづくりへの意識が高まっている。

今回、阿蘇の良さを多角的に見直し、未来へ提案することを目的に「阿蘇まちづくり展」が開かれた。農村公園の一角のアートスペースのアイデアをコンペ形式で全国から募集したのをはじめ、地域づくりの専門家を招いてのシンポジウム、郷土を再発見するためのオリエンテリングなどの様々な催しが繰り広げられた。

折から、阿蘇町では、農村環境を観光やまちおこしに取り入れたグリーンツーリズムや、グリーンストックが検討されている。未来に向けて、素晴らしい自然環境をどう活かしていくのか。このまちづくり展は、町の方向性を再確認する機会となった。

オープニングイベント

日時：平成8年10月26日(土) 10:30～11:30
場所：農村環境改善センター広場
内容：鶴屋百貨店バトントワラーによる演技
阿蘇高校のブラスバンド演奏
阿蘇北中学校のブラスバンド演奏
陸上自衛隊の八特太鼓演奏

まちづくりシンポジウム

日時：平成8年10月27日(日) 13:00～
場所：農村環境改善センター
内容：阿蘇地域の将来像について「環境と地域づくり」をテーマに議論。
◆講演「多自然居住の時代を迎えて」美しさをキーワードに
講師：宮口 侗迪早稲田大学教授
◆環境、地域づくりに携わるゲストパネラーを交えてのフリートーク

PROGRAM

まちづくり体験オリエンテーリング大会

日時：平成8年10月26日(土) 13:00～
内容：まちづくりの一環として整備された町内の施設等を巡り、阿蘇町の良さを再発見。
◆徒歩
(二百十日コース 農村環境改善センター～泉大橋～山王閣～田子山～明行寺～大津酒造～右馬允さん)
◆サイクリング
(史跡・公園コース 農村環境改善センター～山王閣～参勤交代道～産さん神社～的石～お茶屋跡
～観光農園～成川農村公園)

環境とアートポリス展

日時：平成8年10月21日(月)～27日(日) 8:30～17:00
場所：農村環境改善センター
内容：阿蘇の景観・地域住宅写真
町内小学生の風景画
地域づくりの模型提案 他

農村公園アートプロジェクトコンペティション

募集受付期間：平成8年9月2日(月)～10月4日(金)
応募数：167点
審査：10月18日(金)
阿蘇町立体育館で、磯崎 新 くまもとアートポリスコミッショナーを迎えて公開審査を実施。

Kumamoto Artpolis'96



阿蘇まちづくり展

阿蘇まちづくり展 オープニング イベント

OPENING EVENT

SCHEDULE

時/10月26日(土) 10:30~11:30
場所/農村環境改善センター・広場

- アトラクション/
●鶴屋百貨店バントワラーによる演技
●阿蘇高校のブラスバンドの演奏
●阿蘇北中学校のブラスバンドの演奏
●陸上自衛隊の八特太鼓演奏



音楽と踊りで贈る、 まちづくりへのエール

「阿蘇まちづくり展」の一環として、10月26日(土)、
メイン会場となっている農村環境改善センターの広場で、
オープニングイベントが行われた。
参加者たちは阿蘇の外輪山を背景に、
バトン演技や中・高生のブラスバンド演奏、
自衛隊の八特太鼓などを楽しんだ。





阿蘇まちづくり実行委員会の西村達也副会長が閉会の挨拶を述べ、午前の部は終了。午後12時30分からは最後のアトラクションの陸上自衛隊の人たちによる力強い八特太鼓の演奏会。ステージ上には、所狭しと8つの大太鼓や小太鼓が並べられ、鍛えられた6人の自衛官たちが、かけ声とともに見事なバチさばきを見せ、ドンドンと観客のお腹に響くような音を轟かせていた。

音楽を聞きつけて三々五々集まってくる町民たち。当日は、J Aの農産物加工部会が出店し、テントの中では、町内の女性たちが、持ち寄った野菜や手作りのおにぎり、万十などを販売。焼そば、天ぷら、だご汁などはその場で作られ、その温かさに、訪れる人々はホッと一息ついていた。

参加者は高齢の人や親子連れがメイン。幼い子どもが音楽に合わせて体を動かしたり、一生懸命拍手するといったほのぼのとした光景が見られ、素朴で温かいイベントになった。午後からの「まちづくり体験オリエンテーリング大会」参加者の子どもが、少し早く来てアトラクションを見ていたり、オープニング・イベントの午前の部と午後の部の間の約1時間ほどの空き時間を利用して、隣の農村環境改善センターで開催中の「環境とアートボリス展―阿・蘇・美においでよ!―」をのぞく人がいたり、ほかのイベントと合わせて楽しんだ人々も多かった。





まちづくり シンポジウム

阿蘇まちづくり展

全国各地のまちおこしに関わってきた宮口教授が人文地理学の見地から、阿蘇町における可能性と課題について講演。

また、地元青年商工会、建築士会が町内の整備計画についてのワークショップの成果を披露した。

後半は、宮口教授に町内外のオピニオンリーダーたちが加わり、

阿蘇という大自然や地の利を、観光振興やまちおこしにどのように活かしたらいいのか知恵を出し合った。



講演

多自然居住の時代を迎えて、美しさをキーワードに

早稲田大学 教授

宮口 侗 廸



座談会

求められる農村とは、阿蘇の新しい魅力とは

コーディネーター

若井 康彦



出席者

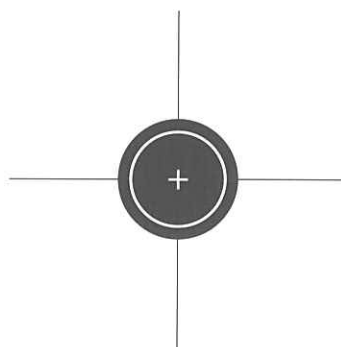
宮口 侗 廸・小野寺 浩・石本 春夫・佐藤 敏満

S C H E D U L E

時／10月27日(日) 13:00～
場所／農村環境改善センター

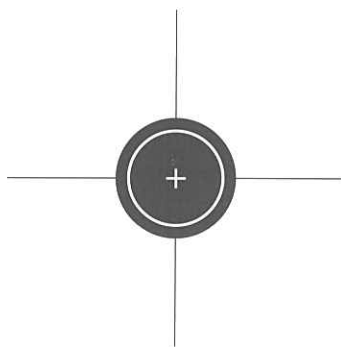
阿蘇まちづくり展
まちづくり シンポジウム

講演



多自然居住の時代を迎えて 美しさをキーワードに

早稲田大学 宮口 侗廸 教授



◆ ◆ ◆
早稲田大学の宮口でございます。
御紹介いただきましたように、

私は富山県の山の中で生まれた人間です。世の中には色々な地域社会があります。東京のような大都市もあれば、私が育ったような村もあります。そのような色々な地域で生活をするようになりまして、地理学をやるようになった人間です。講師の紹介のページがあると思いますが、担当の方がわざわざ「人文地理学とはなにか」ということを書いていただいておりますが、よほど世の中に馴染みのない学問であるために、親切に書いていただいたと思います。その説明に「地表上の人文現象、人口集落、産業、交通、文化などを地域特性の構成要素として、複合的に」という言葉を入れておいていただければ、より近いものになります。どういふことかという、人間が創り出している様々な現象は、もともと相互に絡み合って、存在しています、それを分けて分析して、経済学とか、社会学とかが成立してきたのですが、それをあくまで、ごちゃ混ぜになった状態で、全体を見るという姿勢を持っている学問であることをご承知していただければと思います。

◆ ◆ ◆
私は、山村等小さい村の研究が

ら始めまして、日本の地域社会の発展過程というようなものを勉強して参りました。過疎問題が騒がれる時期に巡り会ったこともありまして、最近では、「次期全国総合開発計画」の策定の専門委員として働いております。熊本県に初めて参りましたのは、今から20数年前です。五家荘という所へ参るためでした。いくつか山村の調査をしている中で、一番山奥の山村は一体どうなっているものであろうかと考えて、当時は、八代からバスに乗りまして、泉村の役場まで行って、更にタクシード8500円かかることでした。メーターもないタクシーでしたけれども、そのあたりのいきさつは、今日お配りしましたプリントの左に書いておりますので、後でご覧いただければと思います。五家荘に何回か通っているうちに、五家荘のある有力者が「先生、阿蘇に行つたことがありますか」というので、「私は五家荘にしか来ていません。熊本に来て、馬刺を食べて、焼酎を飲んで、五家荘に来ているだけなんです」そんな話をしていましたら、ある日、「このところの仕事が忙しくてひと休みしたいから、阿蘇に行きましようか」と、五家荘の木材業の夫妻がここまで連れてきてくれたのが、初めて阿蘇へきましたいきさつです。ちょうど2月のことでした。凍り付いた草千里、冬枯れの阿蘇の山々、外輪山の色、草山が枯れて、私には大変魅力的に思えました。それが最

初だったものですから、梅雨の緑濃い阿蘇の風景は、どちらかというと私には重くて、あまり好きではありません。ちょうど今ぐらいから、私にとっては軽やかな雰囲気好きな時期になります。その時、内牧温泉に泊まりました。それからおそらく20回以上は、内牧へ来ていることになります。今日初めて、阿蘇町での催しに呼んでもらいましたが、役場の職員を脅かしてきました。「役場の人が知らないことでも、いくらでも知っているですよ」と。もちろん半分は冗談ですが、そのような人間です。

◆ ◆ ◆

私をここへ連れてきてくれた人は、私とある縁で付き合いが始まった人です。私が五家荘で日本の奥地山村の歩みというものを研究したいと言つと、その人は熊本に阿蘇というすてきなところがあって、私に阿蘇を見せたいと言つてくれました。しかし、その人は阿蘇町の人ではありませんでした。そのような人がここに私を連れてきてくれることによって、私と阿蘇との交流が始まったわけです。ただ、残念ながら阿蘇町の交流というのは、そんなに広がっていません。したがって、今日お見えになっている方々で、私を知っている方はあまりいらっしゃらないと思います。今日は題名に「交流」という言葉が掲げていませんが、

実は、自然の中であまり人間がびっしりとかたまらない中で暮らすには、交流というものが基本的には、極めて大切なのです。題名にはありませんが、是非、「交流」という言葉をキーワードとして御認識いただきたいと思います。



小国町で「木魂館」という施設があります。お手元の資料に昨年の女性会議のことを書いておきました。近場にあつて注目を集めている町でありますので、少しはご存じだろうと思います。小国町の連中は、少しは役に立つ人間だとわかったら、絶対手放しません。離れていかないように、絶えず、誰かがアプローチをします。けっして、盆暮れに何かを送ってくれるわけはありません。実は、この会に来ることが決まったのは比較的早く、半年前に、県がアートボリスという事業をやっている、その事業の一つとしてまちづくりのシンポジウムをするということでした。私はこの会場に参りました。阿蘇町というところは、なんともものを利用することが下手なところか、と思いました。小国町は、私が阿蘇町へ来ると聞いて、前の晩小国町へ寄って、何かしゃべってほしいと言いだしまして、人が集まる会を設定しました。小国町は足代を出さなくてもいいわけです。別に私に価値があると言っているわけではありません。今日、

アートボリス事業の一環として、まちづくりを語り合おうということとを半年も前に考えていながら、この程度の会場で開かれていることに、私は寂しい思いをしているのです。これはいかに、このこと自体に価値があるかということに皆さんが認識していただいてないかを示していると思います。



今、日本は、いままでの生き方がかなり壊れて、皆新しい生き方がわからなくなっている時代です。例えば、過疎法という法律が今から25、6年前に作られました。いろんなところで、いろんな工夫をして、どんな生き方があるのだろうかということを一生涯勉強しています。今に至ってもまだ先が見えないのが実状です。先ほど、町長さんとも話したのですが、阿蘇町は程々の町で、阿蘇山があり、温泉があります。いわゆる条件不利立法というもののお世話にあまりなっていない町です。世の中には、過疎地域振興や活性化ということについて、山村振興法、半島振興法、豪雪地域のための法律など、たくさん法律があります。このような法律はない方がいいのですけれども、これらの法律に関係する地域では、どうすればいい思い、いい生活ができるかということを考えてるを得ません。今、過疎地域ほど地域づくりが活発なのは、そのような理由からで

す。そういう意味では、阿蘇町がそういうことに敏感でないということは、当然かもしれません。別に困ってはいないのでから。それはそれで結構なのですが、本当にそれで将来磐石なのかということとをときどき問い返してみないと、月日は流れていってしまいます。



今日、後から司会をしてくれる、今年、阿蘇環境デザインセンター事務局長になられた若井さんは、東京にいたときは、東京に住みながら、地方で過ごす時間の方が長かった人です。地域づくりプランナーとしては、すごい実績を有している人です。そのような人が、この近くに住み着いて、今日も働いてくれます。そういう人間の価値をこの地域の人たちが、どれだけキャッチし、すり寄って、お金がないならなににどれだけ使うことができるのかを考えているのか。日頃の刺激がないと、そういう発想は出てきません。要するに、「もっとすばらしい暮らし方があるのではないか」という情報、交流のないところには生まれないのです。温泉町であれば、勝手に人が寄ってきます。夏目漱石もお泊まりになった宿がある。そんなとんでもない人が勝手に立ち寄ってくれる。今も立ち寄ってくれているかもしれません。しかし、いつのまにか、ある時期に、団体旅行の観光が盛り上が

って、修学旅行がどつと来るとか、或いは、婦人会がどつと来るとか、そういうような、旅行社まかせの受け身の中だけで時を過ごしておりますと、たまたますごい人が泊まっても気づきません。私はこの辺りに泊まって、「よかつたら名刺でもいただけませんか」と言われたことはありません。私ごときはどうでもいいのですが、もっとすごい人が泊まっているかもしれない。『そのような失礼なことではできません』と、役場の誰かが言っていました。決して失礼なことではありません。いやならいやといえます。名刺をもらったら年賀状ぐらいは出さなければいけません。名刺をもらっておきながら年賀状さえないようだと、逆効果になります。でもそれは、客を増やすといつことからは言え、ごく当たり前のことでありまして、いわば日本の都市が拡大するかたちで、何でも数の多さを追い求めた時代に、そういうことを忘れて、商売が成り立ってしまったのです。そういう不幸な過去が日本各地にあるわけです。商店街にしても同様です。やるだけのことをやれば、まだまだ栄える可能性はいっぱいあります。簡単な問題に気づかないで、難しいことばかり考える。



私は、阿蘇の風景は世界にふたつとないと思います。その風景の中に、あの噴煙をあげている火口

にどれだけの価値があるかと思えます。私はどうということはないと思っています。私は火口などではなくてもいいと思っている人間です。ところがある時期、「噴煙が激しくて立入禁止になりました。立入禁止になったとたん、観光バスがこなくなりまして」と店の人が言っていました。煙のそばへ行けなくなったら、阿蘇の価値はなくなると皆さん自身が思っているのです。私は、煙をはくところに何度も行くとともにありません。それよりも、訪れる人にとっては、阿蘇の外輪山の風景が、本当に世界にふたつとないものとして認識されるはずです。それを立入禁止だからといって、タクシーの運転手やバスガイドがつまらないようなことを言っていることは、本当にはかかっていると思います。要するに、自分達で自分達の価値を判断していいのです。或いは、何が美しいか、何が人の心に残るかという発想がないのではないかと思います。後で、パネルディスカッションもあるようですから、言い足りなかったことは、そこで補足させていただきます。



今はどういう時代なのか。日本はどういう巡り合わせになっているのかということですが、これは各地で話をしていることですけれども、日本という国ほど他人と付き合わなくてもうまくやっていく

国はありません。それぞれの農村社会が、ひたすら自分が抱え込んだ田圃を守って、なるべく人に渡さないように、兄弟さえも渡さないようにしました。田圃を守るために兄弟にも出ていってもらいました。そうやって村を守ってきたわけです。これが日本の農村が世界一強力に歩んでこれた秘密だと私は思っております。基本的には、親のやっていることをそのまま引き継いできたのです。「今までとは違うやり方をやってみよう」とか、「隣近所の関係がおもしろくないからやめよう」とかは、あまり考えなかった。もちろんそれでもかなりの人が食べてこれました。都市が経済成長をして、余った人間を全部引っ張り込んで、帰ってこなくてもすむようになりました。それどころか、必要な人間まで帰ってこなくなるようになりました。都市の方が、かなり楽に入り込めるようになりました。昔は、都市に入り込むことは大変だった訳でして、決死の覚悟で行ったのです。東京のおんぼろアパートで、歯を食いしばって頑張ったのです。都市が経済成長をしていったことや子供の数が減ったこともありますが、長男をあてにしても、学校を出したら、程々の会社に入ったから、もう気楽だと言って帰ってこない。都市に入りやすくなった訳です。都市の方がそれなりにいい場所になったのです。もちろん一極集中で問題はたくさんあります。都市に行った連中も会社に入って

しまえば、ひたすらその会社のために尽くす。そうやって生きてきたわけです。近所の人とつきあっている暇はない。これが日本の高度成長の時代までの生き方でした。

農村は農村で、出ていった人間と家を受け継ぐ人間は関係がなくなっただけです。当然、都市と農村の交流はありません。一方的に人間が出ていっただけなのです。では隣の農村とは交流があるかといえども、やはりありません。都市へ買い物へ行くようにはなりません。あるいは、通勤ということ、都市と付き合うようにはなりませんでした。隣の村とはあまりつき合わない。というわけで、なかなか、自分とは違ったタイプの人間をキャッチするというようなことはあまりありませんでした。ただ、大都市は過密、地方は過疎、農業は後継者がいない、というようなことで、いまからどんな生き方をするかということが、否応なく問われています。その中で、小さな問題解決が、各地でいろいろ試みられてきたわけです。そのなかで地域づくりという言葉が出てきました。「つくる」という言葉の意味を是非、強く、重く考えていただきたいと思います。それまではただ受け継いできただけだったのです。内牧だって、初期に温泉町ができるときは、いろんな人が集まってきて、投資をして、作ったわけです。これは受け継いだわけではありません。だいたい家業を始めたという人は、いろんな工夫

をし、時には勝負し、ばくちも打ってきたはず。そして代が代わるとだんだん受け継ぐだけになります。農村の場合は、1000年以上受け継がれてきたわけです。先ほど聞いたところでは、内牧も100年ぐらいいは経っているようです。北海道も100年です。100年も経ちますと、受け継いでばかりいると新しいことを次第に考えなくなります。困った困ったと言いつつながらにもしない。地域づくりという言葉は、この先の見えない時代に自分たちが、この時代に何を上乗せできるのかということ。受け継いだものはあるが、場合によっては受け継いだものを否定することだってあるかもしれません。田圃の中に町ができることは田圃を否定することなのです。これが「つくる」ということです。つくって後の世代に渡す。後の世代は、複合的に作られたものを受け継ぎながら、また何か自分たちにあったものをつくる。時代性というものがありますから、古いものを受け継ぐだけでは、その時代の人間は元気が出てきません。今やテレビをひねれば、地球の裏側の話、パソコンをいじれば何でも飛び込んでくる時代になっています。要するに自分にあつたものがそこにできなければそこに意味がない、ということです。



実は私は3日前に山形にいまし

て、文化関係のシンポジウムに出たのですが、東北のある県の教育委員会のある人と話してしまいました。すてきなホールを造って、そこでどのような催し物をするかを教育委員会が考えたら、クラシックにしかないのだと言います。ポップスだとかロックは程度が悪いからいけないのではないかという議論になる。だいたい教育委員会が考えること自体がおかしいのです。ポップスとクラシックとの間に上下はありません。それを上下があるといっている人間が教育関係にいるのであれば、すぐに首にするべきです。そういうところからいじめが出てくるのです。世の中でちゃんと支持者があつて作られている文化というものに上下があるわけがありません。



今の時代に、何が作れるか。作らなくてみんなが幸せになれるならばそれでいいのですが、理論的になかなか成り立ちません。世代は代わります。人間の立場は変わりません。みんながみんな同じ状態でいられる訳はありません。例えば、農水省は農業の対策として集落宮農というようなこともやっています。たまたまある集落で、元気な農家が数人いて、その人達を中心になつてやるから、土地を提供するというルールを作つてやっています。いくつかうまくいっているところはあります。しかし、

10年後同じ顔ぶれではないのです。経てば元氣さも違います。そういう時に、同じ体制で集落宮農ができるかについては、無理だろうと私は思っています。やるならもっと広い範囲で、もっと雑多な人間を巻き込んだうえで、役割分担ができるような仕組みを作っていかなければいけないのです。10年経てば変わるのです。ましてや自分の子供の代にこの地域を元気にしておこうと思ったら、まあまあうまくいっていると思う地域でも、何かやっておいた方がいいのです。内牧温泉の経営状態までは、存じ上げませんが、昔は通りを人がたくさん歩いてたという話ですから、決してニコニコしてられる状態ではないはずだと思います。

これからの生き方がわからないわけですから、今までの生き方のそれを学んでもしょうがないのです。違った生き方から学びがほしい。基本的にはそれが「交流」ということです。経済界では、異業種交流というものが都市部では相当前から行われています。違った業種の人の話を聞く。或いは違った業種の人に自分の説明をする。これだけでも大変なことです。というのは、いつも同じ顔ぶれでは、話を3分の1ぐらいすればだいたい分かってしまいます。実際には、同じ顔ぶれの中では1割程度しかしゃべっていないはずで。ところが、見ず知らずの人の前ではしっかり話をしなければいけない。

これも非難しているわけではありませんが、役場の方に運転してもらっている途中「先生、草泊り」作っただけですよ」と言われました。

「草泊り」とずばり言う前に、もう一言、藁で遊べるような小さい小屋を作ったのであるとか、あるいは、そこで一杯やれるようなところを草泊りというのですというような順序で伝えることができるかどうかということなんです。これが他人とつき合えるイロハであるということなんです。そのような中から新しい生き方が、見つかることがあるわけです。先ほどの阿蘇山の価値ですが、火口へ入れなくても阿蘇はやはりすごい所なのです。

火口へ入れないときは、「今日はたまたま火口へは入れませんが、あんな所を見たことがないですよ」と言っていればそれでいいのです。しかもそれは、観光業として戦略的にものを言わなければなりません。しかし、これまでは、観光業になつていなかったのです。自分がいつも威張っていたために、戦略的になつていませんでした。「とにかく他人にいろいろと言われるとイヤだ」、「とにかく今はこうだ」と言い訳をして手を付けられないように防御をしていたということなんです。

もう少しいやなことを言いますと、阿蘇山があつて、温泉があつて人が来ていました。それはあなた方がいいものを作ったから人が来ているのではないということです。私は富山県の人間ですが、富

山で中央の文化人が講演します。

「富山は水がおいしいですね」「魚がおいしいですね」といって話し始めます。私と違って、まず誉めることによって講演を始めるタイプの人が普通は多いのです。そうすると高い講演料でまた呼んでもらえますから。私は二度と呼んでもらえないと思います。ただ、最近世の中が変わってきました。

やはり辛口の話が聞きたいという地域が増えてます。私は、富山で水と空気を誉めて帰っていく先生の話聞いた人たちに「あんた達はうれしかったかい？」と聞きます。「水と魚は誰が作ったのですか。そこところがっているだけではないですか。要するにあなた達を誉めているのでありません。誉めることがないから水と魚を誉めているだけです」と。魚はまだしも水を誉められたらバカにされたと思うぐらいの根性がほしいと私は思います。たまたま、熊本市も地下水で水には困らないようですが、それはたまたまのことです。



昨日、清和村の文楽を午後から見せてもらいました。小さな集落で伝えてきた文楽を、農家であつたこともありすが、マイペースでやってくるのができた。それに目を付ける役場の職員がいて、これを現代に華開かせようとそれに相応しい舞台を作りました。石井和紘という建築家に頼んで建て

てもらいました。今、年間で、240〜50回講演しています。20人ぐらいのお客がいれば公演するそうです。土、日は定期的をやっているのですが、農家のおじいちゃん、おばあちゃんの60以上の人たちが、墨子になって、人形浄瑠璃をします。浄瑠璃を語っていたのは20代の若者です。ついに育ったのです。あの施設を始めたときには太夫がいなくて、最初はテープでやっていました。村の中で声が良くて、関心がありそうな若者を、支配人が口説いて「浄瑠璃の勉強をしたらどうだ」といって、浄瑠璃の本場の徳島に行かせました。アートポリス事業にも参加して、それに相応しい舞台を苦労して作った。そこで、農業の合間に上演をする。そのため時間をどのように割り振るか。これはいまままでにない経験です。これまではお祭りの日に神社で公演をしていただけでした。いままでにない経験を苦労して作りだしたわけです。その結果、浄瑠璃を語る若者まで出てきた。これはまさにつくり出している状態なのです。文化財が発見されて、その辺に飾って、入場料を取っているという話ではないのです。昨日は若い女性もたくさん来ていました。寝ている女性もいましたが、涙を流している女性も結構いました。そういうことをやっているとか、かわりを持つ人が育つのです。隣にある木造の食堂も作りました。今は上演時間は短いです、将来

は歌舞伎座なみになるかもしれない。そこまでやると農業をやっている人にならなくていい。そこで、「この小さい集落だけでやっていくことは無理になるでしょうね」と支配人に言ったら、「今、壮年部というのを作って、他の地区からも募って育成しています。しかし、みんな仕事があるので、日曜だけの稽古です。しかし、日曜だけの稽古を20年もやれば、60になった時に舞台に立てます」これが支配人の発想です。20年計画です。すごいですね。今は60以上の人がやっています。今40ぐらいの人に、毎週とは言わなくても、月に数回つき合ってもらう。そうすると、他の集落の人に関心を持ちます。隣の食堂では清和村の産物をできるだけ使って弁当を出しています。そうすると農業だって、今まで畑で作った物を目の前の食堂で使うことによって、今までよりも大きな収入になる。一方で芝居も続けられる。農業を大きくしたら芝居はできません。そういう新しいやり方です。聞けば当たり前のようですが、その程度のことまでできなくていいのです。以前から文楽の話は聞いていましたので、昨日ようやくその中身を見ることができて、大変感動しました。昨夜参りました小国町は林業で一時栄えたところです。しかし、林業というものはそのまま、植えて、育てて、切って、売っていたのでは食べきれないということをはっきり分

かったわけです。その時に小国町では、杉をどう使うのか。これまでは杉を背負って来たわけです。阿蘇町では阿蘇山というものを背負っているわけです。温泉だって背負っているわけです。その杉というものをどうのように扱うのか。そこで考えられたのが杉の間伐材を使ってしゃれた建物を作ることであつたわけです。先ほど出されました桂先生も別のタイプの木造の建物を作られた。それが「木魂館」という人の交流の場になっているところ。温泉も何もないところですが、単にそこを会場にするだけで人を集められる。そこには正規の職員が10人います。農家のおばちゃん達が20名います。この農家のおばちゃん達は山村だからと言ってバカにされないようにフランス料理の勉強をし、中華料理の勉強をし、調理師免許を取りました。ですから、あそこは日本一安いフランス料理が食べれるところです。農協でチーズ等を作っていた男性が思いっきりいいチーズを作りたいと思っていましたが、農協では実現できない。そこで、その男性はその木魂館に入ってチーズとソーセージを作ることになりました。何もなかったところが20〜30人が生活できる飯の種になったのです。作ったのです。こういうことが現実起こっているのです。大きな工場が来てくれればいいのというのは、その瞬間の話なのです。いままで全国の山村で工場誘致をしました。確か

に、縫製工場とか、弱電工場とかを誘致して、子供を育てて、手が空いた人たちが家計のために働きました。しかし景気が悪くなったらすぐ閉鎖になる。また逆に、工場は成り立っているのにその人達の後に続いて働く人がない。誘致した工場が働き手がいなくて倒産した例は全国にいくつでもあります。時代の短期的変化に耐えるようなものというのは、じつくりと人間が作っていくことであろうと思います。



昨日は、早稲田のドイツ人の学生に話をさせました。沖縄のある島でドイツ村を作りました。この学生はこの村のお手伝いをしたのですが、「あれは違和感があった、失敗ですね。誰が行くのだろう」と言うような話をしていました。借りてきたようなものを、ただボンとそこにおいているだけでは、人が生活できる飯の種になる道理がないのです。手をかけて作っていく中で、自分がそれを使っていくようになっていかなければいけません。それが新しい仕組みをつくると思うことです。いままでは、都市が大きくなっていく中で、色々なものが作られてきました。電車を1分おきに走らせる仕組みでも、ほっておいてはできないのです。苦勞して作ったのです。水道だって、群馬や栃木にダムを造って、水を引いてこなけ

れば東京都民の水はないのです。そのような話にはわかりやすいと思います。あるいは、有象無象の人間がいれば、相当変わった商売をしてもなんとか商売になります。青山あたりに小さなブティックがあつて、何十万円の洋服がならんでいますが、誰が買うのと思えます。しかし、30000万近い人がいれば物好きもいるのです。金持ちもいるのです。それは2万人、3万人のところでは成り立ちません。そのように、都市が大きくなる過程で生まれてくるものは、あまり人間がいらない所では、そのまま使えないものが多いのです。しかし今までは、都市に近づくことを田舎の発展の物差しにしていたわけですが、確かに、都市で生まれたものはある程度の普遍性を持っています。ですから、ある面では間違いではありませんが、生きる仕組みの根本的なところで、都市に近づいていくということが、田舎において幸せだったのか、この点が問われています。



富山で「国際トイレシンポジウム」という、おもしろい集まりがありました。人間の排泄の問題をどうするかを考えるシンポジウムで、私が「自然環境とトイレ」という部門で司会をしました。日本の登山客が訪れる山は、人間の排泄物の山です。富士山は六合目からおうそうです。「霊峰富士

山」は100km離れないといかないようです。全国の3000m級の山は全てそうだそうです。ですから、山奥の水は間違っても飲んではいけません。そういうことをまじめに考えなければいけないということを2日間議論したので、世界七大陸の最高峰に登った田部井淳子さんに講演をしていただきましたが、彼女は全て持ち帰っているそうです。持ち帰るとい運動はアメリカやオーストラリアでは盛んになってきているそうです。どうやって持ち帰るのかをアメリカの女性を呼んで生々しく話をしてもらいました。アメリカの女性で「山でうんこをする方法」という本を書いた人がいます。世界のベストセラーになっています。道具などの説明が載っています。私もそこまでは考えておりませんでした。私も農村へ行けば「汲み取りでは時代に合いません。お金をかけても、せめて合併浄化槽にしましょう」と言ってきました。しかし、場所と時代によっては、一滴も水を流さないトイレを作らなければなりません。オーストラリアの自然公園はほとんどそうになっているそうです。この「トイレシンポジウム」は単なる民間団体である「日本トイレ協会」という、人間の幸せを少しでも考えるためにトイレを議論しようという団体が主催しました。決してトイレメーカーの団体ではありません。東京の一般市民がお金を出し合って運営をしています。そこが呼びか

けたところ、お金も出さないのに、世界20カ国から来ているのです。それに2日もつき合ったものから、「私も排出物を持ち帰らなければいけないか」という思いになります。



どこまで考えている人がいるのかということ。人間はそれぞれ生い立ち、経済的な状況等が違いうわけです。そうするといろんな付き合い方があります。例えば、地域の将来を考える場合に、常に頭の片隅において勉強することが、自分を色々な局面でいい方向へ考えを進めさせるものになるはずだと思います。「多自然居住」という言葉が今日でありますが、私がつき合っています、次期全国開発計画の専門委員会、次期全総のキーワードとして作りだした言葉です。過疎という言葉は今のところこの計画には出てきません。いまままでできたことがなくなりました。今までのようにできなくなったから、困った。それに対して、それでは何かサービスしようという国が考えてきたのが、過疎対策でした。阿蘇町が過疎地域の指定を受けているかはどうでもいいことですが、理屈として聞いていただきたいと思います。今までのやり方をできるようにすることがいいことなのでしょうか。人の顔ぶれも変わってしまいます。人の数も変わってしまいます。むしろ、自然

と空間をたっぷり持っている人たちが、少ない人数でこれらをうまく使い、自分たちの取り分を増やします。つまり、人間が少ない方がいいのではないのでしょうか。理屈から言うとそうになるのです。皆さんもうまいものは少人数で分けたいでしょう。ところで、日本では、たまたま都市の人口が増える過程で、爆発的な経済成長が起こったために、多い方がいいという錯覚が染み着いているのです。今世界で人口が最も増えている国がどんなに悲惨かをご存じでしょうか。東京はまがりなりにもなんと3000万人近い人が生活できるように、日本人の能力と経済力で作り変えてきたわけです。これ自体は大変なこと。本当にいいことであつたかどうかは問題ですが、1000万人ぐらいいでこれ以上は住めませんという仕組みにしていた方がよかつたかもしれません。ところが、毎日1時間半満員電車に乗れば、仕事ができるという仕組みを人口3000万近い人のところでつくったことは世界に例のないことです。他の地域ならば、毎日30分以上遅刻になるはず。東京の人は、神業のように、電車で整列して乗っているのです。



いままで、親から土地を受け継いで守ってきただけで、「もつと少人数でおもしろいことをやった

ら、うまいことができるじゃないか」、「取り分もふえるのではないか」という発想があまりにもなかったのです。私たちは、「多自然居住」と言う前に「低密度居住」ということを言っていました。つまり、人口密度が低いほどおもしろいことができるのです。人口密度が低いから幸せで楽しい暮らしができるという状況を作ること、これが田舎の暮らしの方向性だと思います。「低密度」というのはよくないと国の役人が「多自然」という言葉をひねり出したのです。もつといい言葉があればそれでもいいのですが、この言葉の意味はそのような意味です。少人数でうまく使う。これは、各地域で考えることしかありません。日本人は残念ながら「地域オリジナル」のなかった国民なんです。要するに、東北から九州まで田舎の作りは皆同じです。私に言わせると、農村風景にほとんど違いがありません。しかし、阿蘇の風景は違います。このことは誇ってもいいことです。山に木が生えていない。山に木が生えていない所は、日本にはめつたにない所なのです。要するに、山すら使わないでこれた。人が田舎だけを使って、山は補助的にしか使わなかったから、山に木が生えているのです。場合によっては共有地の所もあります。個人所有にもなっていない。そういう理屈で言えば、阿蘇は土地を最大限に使って、農業プラス牧畜をやってきた日本では珍しいところ

です。私が阿蘇へ来たときに、日本でふたつとない所だと感じました。風景が美しいと言っただけではなく、人間の生き様の歴史というものがそこにあるからです。永久に、無理に山を焼いてこの状態を続けるのがいいのか、この点は私には分かりません。

今時代に、この土地に住む人たちが、場合によっては、他人の力を借りて、アイディアを借りて、土地をうまく使い、何人が生活ができるのか。10人が生活するには簡単ですが、100人が生活することは難しい。人が減れば簡単になります。だから人口は増えない方がいいと思います。幸い、今は簡単に増えない時代です。もう、増えること期待することはまったく必要ありません。ところが、まだ、建て前として、増やしたいとみんな言います。総合計画を作る際に、将来人口を予測しますが、現実味のある話ではありません。適度に減りながら、ちゃんとした飯の種が、生活ができる基礎が生まれているかです。高齢化しているのです、しばらくは必ず減ります。高齢者が多いのですから。人口ピラミッドは、頭の大きいきのこのようなものです。どれだけ生まれても、きのこの頭の部分がなくなると減りません。新しいものが生まれるきっかけ、アイディア、チャレンジ精神等は自分たちだけで育てることは難しいのと思います。限られた中で、顔を突き合わせていても、なかなか生まれてき

ません。世間には様々な人がいます。阿蘇環境デザインセンターの若井事務局長も東京にいて十分生活できていました。おそらく、阿蘇に来て、年収が減って悔やんでいるのではないかと思います。やっぱり、変わり者なのです。いままでの変わり者というのが、これからのまっとうな人たちになるのです。地域地域をちゃんと見据えている人がまっとうな人なのです。こういう原理は、農村でも、温泉町でも変わりません。例えば、温泉町であれば、借金して大きい旅館を作ってしまうよりは、何もない農山村の方が楽だということです。昨日、清和村に行きましたら、手つかずの高原がたっぷりありました。絵を描くにも白紙に描く方が楽です。ただ、今までの都市で生まれた発想で絵を描くのではありません。自然というものをうまく活かしながら、絵を描いていくのです。この阿蘇町ではいろんな要素があります。街もある、山もあります。私は阿蘇町には、内的な交流が不足しているのではないかと、直感的に思います。農業をしている人、温泉街の人、観光業の人等、もっともっとつき合う機会を作るべきです。つまり、こういう集まりが交流を作るきっかけになるのです。ですから、今日の椅子の数は、私にとっては少ないと思うのです。

〈終わり〉

熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」阿蘇まちづくり展

まちづくり シンポジウム

主催・くまもとアートポリス'96実行委員会 主管・くまもとアートポリス'96阿蘇まちづくり実行委員会



阿蘇まちづくり展
まちづくりシンポジウム

座談会

求められる農村とは、
阿蘇の新しい魅力とは

ATTENDANCE

宮口 侗廼
早稲田大学教授



小野寺 浩
環境庁九州地区国立公園野生生物事務所長



石本 春夫
阿蘇町商工会会長



佐藤 敏満
阿蘇まちづくり展実行委員会会長



COORDINATOR

若井 康彦
阿蘇環境デザインセンター事務局長



阿蘇の風景はすごい過ぎる

若井 ●私は平成8年の3月まで東京で仕事をしていたんですが、通勤するのに毎朝1時間15分かかって、片道1100円の電車賃を払ってました。一日で2200円、25日で6万円の出費になります。こちらに来てからは、その6万円が全部懐に残るようになりました。時間も毎日1時間くらいずつ余計にあるわけです。得したのか損したのかよく分かりませんが、ただ経済学者の人に言わせれば、皆が私のようになってしまつと地下鉄は成り立ちませんね。産業は育たないわけです。どっちがいいんでしょうか。いずれにせよ、都市と阿蘇と暮らしぶりはすごく違うと思います。それは生まれた時からそうだったのか、あるいは自分たちで少しずつそういうものを作ってきたのかいろいろですが、それをこれから新しい時代に向かってどう作っていくかということが、広い意味でのアートポリスじゃないかということで、今日はあまりデザインにこだわらずに議論をしていこうと思います。小野寺さんは昨年の8月からお仕事の場所が黒川地区でしたね。

熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」阿蘇まちづくり展 まちづくり シンポジウム

主催・くまもとアートポリス'96実行委員会

主管・くまもとアートポリス'96阿蘇まちづくり実行委員会

演題「多自然居住の時代を造る」

佐藤敏満

石本春夫

小野寺浩

宮口伸雄

若井康彦

小野寺 ●環境庁の九州の出先の所

長をしております。簡単に言いますと、九州にある4つ国立公園の管理計画立案、それから、阿蘇のハナシノブや対馬の山猫のような野生生物を守るための仕事をしていきます。阿蘇には何度も来たことがあるのですが、こういうかたちで、阿蘇はやっぱりすごいと思います。私の出身の北海道は日本の大体4分の1の面積でめちゃくちゃ広いんですが、500万人くらいしか住んでません。根釧原野とか道東の方は平坦な土地が続いて草原もいっぱいあります。そうすると、阿蘇の広々感は、どうも広さだけではなく、このカルデラという地形と草原との関係が非常にバランスがよいのではないかと考えてくるんです。

もう一つ、この自然空間の広がりによつと暖かさみたいなものがあるって、北海道の風景や東北の下北半島の風景とはちよつと質が違ふんです。向こうはちよつと荒涼とした感じがするんですね。阿蘇全体の景観の暖かさは人間が長い時間をかけて関わってきたという感じが、目から意識の方に伝わってくるんじゃないかと思います。しかしながら、スケールが雄大だということと、それをどうするかというのは大きな溝があると思いますね。

宮口先生のご出身の富山には立山連峰がありまして、3000m級の山が富山市内から屏風のように

に見えます。圧倒的な景観です。

静岡県に行くとき富士山があつて、これがまたすごい景観。私は3年前まで鹿児島県にいたんですが、鹿児島には桜島があつて、ちよつど数km先に噴煙をあげる根子岳があるような感じなんです。そこで、スケールの大きい景観と人間の意識がどういう関係にあるかと言うと、例えば、鹿児島を例に上げるとですね、ホテルとか食堂とか若い人向けのお店は、桜島を取り込むかどうかに掛かつてるんですね。周辺の石橋とか小路や並木がいいとかいうのは全部吹き飛んでしまふんです。桜島がいい角度で見えないところは、全部諦めてしまふという構造なんです。阿蘇についても同じ関係があるんじゃないかという気がするわけです。景観があまりにもすごいものですから、それに抵抗してみてもどうにもならないというイメージがあるのではないのでしょうか。観光施設や道路など人工的な建物とスケールの大きい自然景観とのバランスから考えると、それほどのものは生み出してこなかったような気がしています。

若井 ●今、いろいろ問題提起していただいた分については第2クールで話し合つていきたいと思ひます。佐藤さん、今自分がしておられることについてお話し願えますか？

佐藤 ●私は20年近く設計に携わっています。阿蘇町のいろんな公共施設の設計や平成4年からの地域

住宅計画をはじめとして、まちづくりなども機会あるごとに参加させていただいております。私も学生時代は他所にいて帰ってきたのですが、阿蘇というのは生まれ育つた所でもあるし、いつ都会で疲れて帰つてきても、阿蘇の原野に寝ころがればいつでも迎えてくれるような優しさがあるわけですね。私は阿蘇のそういった大自然を生かしながらいろんなまちづくりに、建築業に努めていかなければならないと思っています。



「農村リゾート」の可能性と問題点

若井 ●ありがとうございます。次は石本さん、農村リゾート推進協議会ということですが、石本さんにとっての阿蘇は何でしょう。

石本 ●商工会長、行革連の会長、あるいは農村リゾート推進会の会長と大切な役職をたくさん仰せつかっております。私の考え方、やり方一つで阿蘇町の将来を左右するといくらに、私はこういう肩書を真剣に受け止めて日々努めておるようなわけでございます。

阿蘇町では農村リゾート推進という言葉がここ10年くらい前からはやっておるわけでございますが、なかなかご理解がいただけてないように思います。実は、昭和63年から平成2年にかけて、阿蘇町の10年間の総合計画を作ったわけでございます。この計画を作る過程において、大きな柱の中に「農村リゾート」計画という言葉が出てきたわけでございます。当時は、まだあまり聞いておらず、世界の

「農村リゾート」の先進地はスウェーデンだということで、町長を団長に一行10名で10日間くらいの予定でスウェーデンに参ったわけでございます。

スウェーデンは約140年くらい前は、人口の3分の1が、産業がなかったために海外流出したという経緯がございます。そこで残された家庭の主婦は、何とかして自分達の生活の道を考えなければならぬというようになりまして、主婦の副業という、ほとんどの部屋が空いている。スウェーデンの主婦は「日曜祭日、休日にぜひ一つ農村に遊びにいらつしやい」と。農家の部屋に都会の人が家でとれた牛乳、チーズ、バターを提供。サービスも全て家族。人手が足りない場合は、親戚から手伝いで賄っていました。すると今度は、お客様にお土産を売ろうということになります。ここは

非常に牧羊が盛んなので、羊の毛でマフラーや手袋を作ったり、あるいはオークという櫟の木の一で馬の人形を作ったり、そういう土産を手作りしたわけでございます。これを現地ではヘムスロイドといいますが、スウェーデンでは有名なお土産になっています。こういう発想が、結局、国外に流出していた人々を国内に呼び戻したのです。これが一つの「農村リゾート」の基本的な考えであること了我々はスウェーデンに行つて学んだわけです。

若井 ●今、重要な論点がたくさんあったと思うんですが、やっぱり阿蘇という自然の一種の特性、佐藤さんの言葉で言うところ、抱かれていますような大きな自然、そういう自然の特性についての論点というのが一つありましたね。それから、石本さんが今後新たに展開しているところとされている地域の方向性を、「農村リゾート」というキーワード



ドで提示して下さっているわけです。この自然特性の中で、農村リゾートと規定するようなことが、これからの地域づくりにとつてどんな意味があるのか。あるいはどの程度可能性があるのか。あるいはどんな問題があるのか。宮口さん、その辺はどうですか。

宮口●阿蘇はすごい風景でいろんなことが小さく見えてしまうと、小野寺さんはおっしゃったような気がするんですが。それから“あったかい”というのは、阿蘇の外輪山の下が水田農村だからということですね。僕はこの外輪山の中が水田だということに大変感動しました。ギザギザの根子岳や中岳の噴煙とか、あるいは外輪山が屹立している、それが草山になっているというようなことにドキッとしたんですね。そういう事からすると、建物はやっぱり阿蘇の中では小さく見えるということは、人間がどれだけのパワーを持っているかというようにかなと思います。

それから、「農村リゾート」については、農家全員がやるものではないということを出発点にすべきだと思ふんですね。どうしても今までの日本の地域社会というのは、町内会で商工会で集落で議論する。要するにみんなが同じことをするものだと思つて議論をしているケースが多いんです。本当は、人口は増えなくてもいい、店も増えなくてもいい、商売敵がつぶれればうれしいはずなんです。店の

数が減るといふことと商業の発展とはほとんど関係がない。まっとうに商売している人がちゃんと伸びてくるかどうか、商業の活性化の基本だろうと思います。「農村リゾート」を議論する時も、全員参加でやるかのように考えがちなんですけれども、そんなことは最初から成り立たない話なんです。ですから、こういう問題は別に散らばっていてもいいんです。「農村リゾート」は、農家民宿プラス

多少の農業体験、その辺で散歩したり遊んだりするといふようなことだと考えますと、逆に、戦略として考えるなら、あっちでちらほらこっちでちらほら、俺もやるよ、俺もやるよの方がいい。ただ、大事なのはそういう人たちがネットワークを組んでどれだけの力を付けていくかということなんです。

今、中山間地域に農水省は随分お金を用意しましたので、どこにいても農村リゾートの視察とかやるんですけど、その辺がちゃんと整理されてるのかどうか問題ですね。基本的には十分成り立つ話だと思ふんです。ただ、成り立つといふのは、場所がいいから成り立つんじゃない、宿がいいから成り立つ話なんです。もともと、農家民宿をちゃんとやる人の所へ客は集まるわけでして、勿論阿蘇山が見えた方がいいに決まっていますけれども、誰でも同じように成り立つ話ではないといふことを、きちっとわきまえてスタートされるべきだと思います。どれだけや

れる人がいるか、そして、それが評判を呼んで、日本の農家民宿への滞在といふのがもう少しブームになっていかないと、数は爆発的には増えないと思ふんですけどね。さしあたっては、誰がやれそうかという議論をした方がいいんじゃないかと思います。



資源を掘り起こして、個性化を図っていく

若井 ● 宮口先生の意見というのは、農村リゾートは農村的な空間や景観ではなくて、そこを経営する人たちだと。ライフスタイルだとお

っしゃってるんだと思います。先程黒川地区や内牧地区の模型の説明がありましたけど、そういう観点からすると、こういう構想はどういう位置付けになるんでしょうか、佐藤さん。空間的な問題もあるけれど、基本的にはそこで暮らす人達の意識とか、暮らし方であるとか、よその人との接し方であるとか。住んでおられる方にとって、というご説明がありましたけれども、そういうのを含めてライフスタイルというんですかね、そういう問題をどう考えていくのでしょうか。

佐藤 ● 我々は黒川地区を限定したわけですが、地元に住定できるような住環境、都市環境を作ろうというのが我々の基本的な考えであるわけです。観光客云々よりも、私は地元でみんなここで生活したい、ずっと住みたいと思えるような町をまずは作ることが前提では

ないかなということですね。建築士会としてはそういった方向づけで、今回の黒川の模型というのは取り組んだわけです。

若井 ● リゾートというのは地域の一種のイメージだと思うんです。小野寺さん、国立公園を広い意味でのリゾートと考えると、その真中には当然質の高い人工的な集積というか、まあ“まち”が必要なのはどうお考えになりますか。

小野寺 ● 必要かどうかと言われるば、当然必要だと思えますね。人間が生活する上で必要なものはいっぱいあって、その必要なものの水準が上がったり多様になったりというのが我々が辿ってきた道だと思えます。そうするとそれを満たすために何が重視されてるのか。例えば、東京や県庁所在地が一極集中してきたことが説明になると思うんですが、ところが3000万人になって今逆転現象が起きている。集まり過ぎてうんざりしちゃったと。そうすると、農漁村からは当然人が減るわけで

ですね。農地にしろ森林にしろ山村にしろ、広大なスペースが一方で出て来る。適正人口というのは難しい議論になりますが、実際はかなり広大な空間ができる一方で人口過密と結び付くんだと思うんですね。それはリゾートという形で何日か過ごすのか、もっと長い期間を過ごすのか、あるいは限定された長期間を滞在するののかという議論があると思うのですが、どう考えても国土全体のうまい使い方は、あるいは個人の豊かさからいけば、何も365日かつ60年同じ所に混みあって住むということには多分ならない。ライフスタイルは、佐藤さんは地元の側でおっしゃったけれども、都市の側のライフスタイル、あるいはライフコースみたいなものがある。「農村リゾート」で、広大な空間を都会とうまく調整して、という方がむしろ当然であると思います。そのことと、「農村リゾート」なり地域おこしなり、観光の議論がどう結び付いていくのかまだはつきり見えてない。こういうことじゃな

いでしょうか。

若井●今のお話でかなり構造はよくわかるんですけど、この阿蘇のカルデラを例についてはどういふ問題があるんでしょうか。

小野寺●僕は地域をつくっていくというのは、その地域をどう個性化していくかに尽きるところだと思います。例えば47都道府県があつて3300市町村がある。それらがすべて同じようなことをやったら、みんな競合関係になりますよね。商売という意味でもまずいだろうし、そこから抜き出るといふのも大変だろうと思います。

そうすると、個性化をどう図っていくかということですが、特に地方においては、そこにある自然や歴史、文化といった資源として活かしていくかということに、これも必然的につきるんじゃないかと。そうでなければその地域がその地域である理由というか、世間にアピールする所というのがなくなるであらうと思うんですよ。そういうことが地域づくりという事の中でまず考えられる必要がある。僕は環境の方に長く身をおいている人間ですけども、その環境と開発なり、事業というのが実はその対立的かどうかということにもなると思うんですね。

明治以来、日本の地域おこしは、基本的には公共事業と企業誘致致だったと言いつてもいいと思うんです。そして、いつの間にか、どういふ地域をつくるのかというイメージが弱くなって、手段の方だ

けがものすごく強くなっている。そこをもう一度、阿蘇でどうつくり変えていくかということだと思ふんです。

例えば、一の宮に坂梨という集落があり、1月から2月になると、旧街道に梅がいつぱい咲くんです。一軒一軒が梅の古木を大事にしてて梅並木になっている。地域をつくっていくというのは、そんなことを核にするんだろうと思うんです。そういうものの上にどれだけ気の利いたスナックとか店があるかということではないと思うんです。確かに黒川沿いの桜並木はすごくいい。でも、散策する雰囲気にはなっていないと思うんです。

自分たちの地域の個性の中心になるものをどうしていくか。街のデザインをよくしたり、アメニティを固めたり。自分たちが誇りを持つて生きていけるものも出てくるんじゃないかと思ひます。

若井●小さいものの中から資源を掘り起こして個性化を図っていく、あるいはそれを広げていくという戦略的な方向付けをいただいたわけですが、石本さん、今のようない問題、切り口を含めて、どういふことをしようとしていらつしやるのか。商工会の立場を含めてお願いいたします。

石本●小野寺先生は、私が日頃考へておることと全く同じことをおっしゃつて、私も実はどきつとした次第です。おっしゃる通り、全国3300の自治体が今後どうやって町の運営を図っていくかと、

みんな一生懸命になつておるわけですね。私どもの町では素晴らしい自然を活かしているかと、いろんな事業をやつておるわけでございますが、本町の場合は国のグリーンツーリズム、グリーンステイ、グリーンストックの3つの指定事業を受けています。その中で私どもとしてはこの土地、自然環境、この素晴らしい環境を、都会の人たちといふんな知恵を出しながら、共有、共生することによって新しい阿蘇町のリゾート作りをやつていこうという考えでおるわけでございます。

一例を挙げますと、近くに湯浦という部落がありますが、この部落も従来の米とか森林だけではなく、その土地を都会の人々に提供することによって新しい農村作りをやる、いわゆるニューファームビレッジ計画を進めています。先日、NC熊本さんがグランパルコという別会社を作り、43億円の財源の投入をして新しい村を作ろうとしています。これは自然をそう簡単に壊さず、むしろ自然に付加価値を付けながら地元と共に栄えていくということなんです。落成が平成11年の4月で、国体前に成功させて町の活性化を図つていこうという計画です。

若井●今のお話を小野寺さんの話でいうと、公共事業と企業誘致というパターンに近い気もするんですが。阿蘇町固有の資源をそこに住んでいる人たちが例えば見方を変えて、あるいは取扱ひ方を変え

て積み上げていくと。そういう意味で考えれば、佐藤さんたちが考えておられる市街地の計画なんかは、そういう点に立脚しておられると思うんですけども…。

佐藤 ●確かに他所からの企業誘致とかに頼らないでもいろんな地域の個性はあるわけです。いろんな歴史とか文化とかたくさんあるわけですね。そういったものも活かしながら、まちづくりに取り組もうとしているわけです。

例えば、黒川地区には西巖殿寺というような昔からの史跡がございます。こういったものを中心にした歴史的な公園なんかを自分たちで作って、外の方でも十分満喫していただけるような施設はつくれるんじゃないかなというようなことですね。

若井 ●どうですかね。今のような話は。

宮口 ●先程の佐藤さんの話に、定住できるような都市環境を作っていきたいというお話があったんですが、都市というのはキリがないわけですね。熊本レベルもあれば、東京もあるし…。

佐藤 ●ポイントを突きましたね。実際我々が考えたのは、阿蘇町は今人口1万9000人余りで、確か私が昔考えた時は2万2千何百だったと思うんですが、そういったことで人口は少子化の現象もあり、減っているわけです。なぜそう考えたかという、若い世代が、全部都会とか、熊本とか大津辺りに流出しているという現実がある

んです。それに、ある程度の家庭の人たちは、教育を熊本市内に求める傾向があるわけです。

我々自身もそういったことをやってきたわけですから、そういう気持ちも十分分かります。都市部への流出を少しでも食い止めるには、今の阿蘇町には何が不足しているかというものをみんなで検討したのが今回のやり方です。実は、阿蘇駅界隈には銀行がないんです。そういった最低限の社会整備もないような状態ですから、若い世代や子育てする女性にそこで生活しろというのも非常に酷なことだろうと思うんです。

若井 ●ちよつと話が逸れるかもしれませんが、私が阿蘇郡の流れを調べていて、とても注目すべき数字がありました。12町村の中に9つの過疎地域があるんです。過疎という言葉は使う必要がないと思うんですが、制度的に指定されているわけです。ところが中身を見て非常に愕然としたんです。全体の人口は減ってるけれど、増えている年齢層もあるんですよ。そう言くと、皆さん、高齢者だと思われるでしょう。そうじゃないんです。20代と30代が増えているんです。まあ、この軽重の問題はなかなか難しいところで、自分の手が届く範囲にいろんなものがあるということなのか、あるいは車を自在に使って自由に生活できるという環境を作るのかという問題はありますよね。そういう観点から考えると、まちづくりというのは、

どうあるべきかを考えてみる必要があるのかなと私は思います。先程、多自然居住の話がありました。阿蘇は将来どっちの方向にいったらいいのでしょうか。

石本 ●私はやはり、この阿蘇の自然を徹底的に活かしていく他には方法はないと思います。例えば、国を決して批判するわけではないんですが、国は一つの問題について、全国同じような指導方針をするわけです。私はこれを羊羹型の政治というんですが、どこ切っても同じ、魅力がないわけです。阿蘇郡11町村がみんな同じ内容の開発をやっては意味がないと思います。阿蘇町はあくまでも阿蘇町らしいことを考えてそれに対応していくべきだと。ここには6400町の山林、6000町もの原野、600町もの畑、3200haの水田、35軒の観光旅館、それから世界一の阿蘇山がある。これだけの経済基盤がありながら、どうしても少し内容がよくないのか、といった疑問に思っているんです。今までは阿蘇山だけで何とか飯が食えよったけど、もう阿蘇山だけでは物足りない、ということでしょう。

ごく最近のデータですが、小国付近は客数が190%増えているのに、この阿蘇町だけが95%に留まっているんです。私たちとしてはこれだけの経済基盤を持ちながら誠に残念な話でして、商工会活動にしても農村リゾート構想にしましても、真剣に取り組んで、

一つずつクリアしてるような次第です。

例えば、商工会で3年前から花いっぱい運動を展開しております。これには2つの動機がありました。今、大店法の規制緩和で、現在はまだ町外資本が55%を占めている状態です。残りの45%が私ども、商工業者の仲間でございます。しかも一番売れる商品はほとんどそういう大型店が売り、残りのわずかな商品を、従来通り昔からの住民の方々から買っていたいていいる。大型店舗に対応するには経済的なサービスは余り出来ない。であれば、わざわざ買物物においてになる方々に、花でも飾って心のお礼を申し上げよう。これが一点。

それからやはり、観光地ですから、花を植えて、お客さんに、ああいいなと思ってもらえるような心のサービスをしたいというのが一点です。もうちょうど3年になるわけですが、最近軌道に乗って、来年あたりは区長会もぜひ参加させてほしいと言ってきております。他に、内牧から坊中への道路、それから8kmの農免道路も、一年中何らかの花が咲いてるようにしたいと。ただ阿蘇山だけに頼らずとも、花でも人が呼べる。こういう考えのもとに計画しておるわけです。

若井 ●ありがとうございます。

今のお話の中にあつたすでに阿蘇にある原野の景観とか、カルデラの中に広がっている田園景観というの、あれは自然じゃなくて人

工の景観なんです。自然と人手が一体となって阿蘇という景観を作ってるんですけど、それは、ある意味で時代の産物なわけです。ある状況の中で作られた一つの景観をこれからどういう風に活かしていくのか、あるいは保全していくのか、積極的に作り替えていくのか、そういった問題もこの地域をどうしていくかという上では、大変大きな基本的な課題だと思います。市街地の話も実はそれにつながっているとは思いますが、小野寺さん、基本的にどういうスタンスでものを考えていったらいいんでしょうかね。地域づくりに、決まった答はない。

小野寺 ●人工と自然環境との関係と言う時に、当然人間側の要求なり社会的な要望なりというのがあるわけですから、ある機能が備わって欲しいと思う気持ちに逆らうのは無理じゃないかと思うんですね。だから、そこその周辺の環境というか、自然とどういう関わり方をするのかバランスということが一番問題になるんだと思うんですよ。私は最初に話した中で、企業誘致や公共投資はもう止めた方がいいんじゃないかと言っているように聞こえたかもしれませんが、私は実はぜんぜんそういう風に思っていないんです。公共投資も企業誘致も、阿蘇について言えばもともとやった方がいいと思ってるんですよ。ただし、手段が目的になるようなやり方は、地域にとってあまり効果がないと言いたい

んです。

地域を本当にどう作っていくかという時、意識とか誇りとか、経済とか雇用とかいろんなことを考えると、自然環境や歴史という資源を生かして作り上げていくところがどうしても必要なんです。あの需要がライフスタイルなりライフコースの間で、生まれてくるというのはむしろ当然なんです。しかし、その需要と供給とのバランスの取り方は誰も見出してない。環境と人間の問題でもそうですし、地方の問題もそうですし、大都市も人口過密の問題もそうですが、はつきりいつて答えはどこにもないだろうと思ってるんですよ。参考はあっても答えるものではない。それは阿蘇であれ東京の中心であれ全く同じだと思う。そこで何をするかと、やっぱり個別の一個一個でしかないと思うんですね。道一本歩道一本作るという具体的な課題の中で得てきた答の総和が、この回答であるかも知れない。どつかであつたものを引っ張ってきても、それは回答にはなり得ないというところから出発したいなと思うんですね。

若井 ●話がよいよ原点に戻ってきました。先程宮口先生の話の中に、地域づくりには決まった答がないというのがありましたね。しかし、システム自体は、公共事業のように、基本的には以前の枠組みで出来ている手段を使うしかないというジレンマがあります。宮口さん、阿蘇の場合はどこら辺に

切り口を求めたらいと思われま
すか。

宮口●さつき、銀行がないから必
要だと言われることよく分かるん
ですが、そのために、もつと町並
みを大きくしようというのは間違
いだと思うんです。銀行がなくて
不便なら、地域でどのくらい銀行
に金を預けるのかを議論、交渉し
てキャッシュカードコーナーくら
い付けるとか、そういうやり方で
いいと思うんです。必要なものは
そうやって議論して設置していく
んです。そういうことは大いにや
っていただきたいんですが、ただ
漠然と、人口30万の都市と同じに
なればいいという発想は間違いだ
と思います。

多自然居住という言葉を、我々
は人口10万くらいの都市も含めて
使ってるんです。人口10万くら
いまでの都市は、商業が成り立た
ない地域なんです。ですから、周
辺の農山村といかにうまくやって
いくが重要になってきます。単に
買い物に来てもらうだけじゃなく
て、農山村の産物で出店をして
もらい一緒に遠くから人を呼
び込む。周りの農山村の力をも
借りて、別の所から人を呼び込む
らしいのことはしなければ人口10
万くらいの町は成り立たないだろ
うと。ですから10万の町でも多自然
居住なんです。ましてや1万、2
万の町はどうかと考える時に、や
っぱり漠然と都市的なレベルに
挙げるという発想は止めた方がいい
んです。これは欲しいけど、これ

は要らないということを、少しコ
ンセンサスを取った方がいいです
ね。そういうことを議論すること
によって、自分の生き方がようや
く見えてくると思うか、こういう
自然の中で、このくらいの大きさ
の町で暮らすというのはどうい
うことなのかということが。

定住出来る都市環境には当然飯
の種がなければいけない。例えば
工場誘致をするにしても、「高給
な技術者がたくさん来るなら、う
まくいけばうちの娘の婿になるよ
うな素敵な人が来ないかしら」と
いうぐらいのレベルでやってもら
いたいですね。山奥へ行けば賃金
が切り下げられ放題というのは
つまらぬと思いますね。

今日、配ったプリントの中に、
五家荘の一番奥地の樅木という所
の黒木千代子さんの話が載って
います。彼女は、福岡で5年間草木
染めと織物の勉強をして故郷に帰
ってきました。親父さんがお前が
村に帰って来ればお前の望み通り
の工房を作つてやると言い、実際、
山を売つて立派な瓦葺き屋根の家
を娘のために作りました。そして、
今、そこで一人で木の皮や山野草
で糸を染め織っています。

飯の種を作るといふのはそうい
うことなんです。内牧のように大
きな温泉旅館が並んでると、一人
が草木染めを始めたつて「何だあ
の程度のことか」、という風な目
見るかも知れませんが、口から物
を作るといふのはそういうこと
なんでしょう。ですから、そ

ういう人がもしこの辺から現れた
ら町中で応援をしてもらいたいわ
けですね。そういう人が50人にな
ったらすごいですよ。それが定住
者が増えるということなんです。
ちゃんと稼いで税金を納めてくれ
る。そしてこの地域の環境を活か
す、ということなんです。です
から人口が500、1000の村へ
いけば、一人そういうような人が
いるだけで大変な話題です。で
すから「農村リゾート」も、シス
テムばかり考えないで、あの人が
どうやってやればいいのか、この
人がどうやってやればいいのか、
俺はどうやってやればいいのか、
というレベルで考えるべきだと思
うんです。うまくいけば、それが
システムとして機能していくと思
うんですけ
どね。

なぜ、人口が減ったのかとお
っしゃいましたけど、減るのが当
たり前なんです。日本では、県庁
にくっついてない限り、減るのが
当たり前なんです。たまたま大津
に行つたか、熊本に行つたか知
りませんが、そういう人たちは
ここが熊本にならない限りは行
つてしまふんじゃないんですか？

それから教育の問題にしたつて、
早くから塾へやり、まあまあの大
学にいった人の末路が、そんなに
みんな素敵なわけではありませ
んよ。そんなことははっきりして
るんです。早くから学校行かなく
て勝手なことする人間に時々素
敵らしいのが出るといふことが
話題になつてる時ですよ。阿蘇
の自然の

価値を本当に子どもに満喫させて
るか、あるいは、修学旅行で来る
生徒たちに、地域として何かをち
やんと与えることが出来ているか、
前と変わらないんだったらやっぱ
り段々減りますよねえ。

というように、僕としては一つ一つの顔が見えるところで
施策というのは展開していく、
人口が1万、2万くらいの町は、
それでいいんじゃないかという風
に思っていますね。だから誰がど
こで何をしているということが話題
になる、1、2万の町ならそうだ
と思うんですよ。黒川のあの辺で
こんなことを始めた人がいるら
しいから、今度覗きに行ってみよう
かとか。

また余計なことかもしれませんが、今
日小国町の役場の方がここに一人
いるんです。私の話聞き飽きてる。
だけどひょっとしたらもう一つく
らいいいこと言うかも知れないと
思って今日来てるんですよ。阿蘇
町の人は小国町に誰かの話を聞き
に行ったことはないと思いますね。
おそらくゼロだと思いますね。だ
から小国に来る人が増えるんです。
彼は日曜日自分の時間使って来て
るんです。そういう人間がいるか
いないかというだけの話なんです。
そういう人間がいることを喜ぶ人
が周りにいるかどうかなんです。

阿蘇の持てる利点をもう一度見直してみる。

若井 ●私は阿蘇にくる時に、パソ
コンを1台持ってきたんです。あ
とは何も持ってきてませんでした。
電話にパソコンをつないで、日本
中の人からお手紙をやり取りした
りする。みんな均一料金なんです

よ。郵便の切手と一緒にです。郵便
と違って距離に関係なく一瞬のう
ちに北海道から沖縄までみんなつ
ながっちゃうわけですね。案の定
増えたんですよ。それは要するに
二つ理由があります。昔はいろん

な情報は東京から出ているはずだ
ったんだけど、一番人がたくさん
住んでいる東京の人達が東京の人
同士でやっても面白くないんです
ね。だからわざわざ北海道の原野
だとか、沖縄の離島だとか、それ



から阿蘇のカルデラの真中なんか
に最初につないで来るんですよ。
それが一つの理由。

もう一つの理由は、要するにつ
ながりやすいんですね。一人当り
のインフラ、渋滞がないから道路
の面積がいっぱい一人で使える。
あるいは電話回線が空いている率
が高い。だから結局皆さんの方が
有利なんです。銀行の店舗があ
るかないかって、これからはキャ
ッシュじゃなくなるかもしれない
わけですね。だから意外とそう
いうものに着目するという地域作
りもあるかもしれないですね。そ
ういうものを前提に自分の新しい
暮らし方を考える可能性というの
もあるかも知れない。

何かそこら辺の話をもう少しし
て見ると面白いなと、私は今お話
を聞いてて勝手に思ったのが一つ
と、もう一つはですね、現実的な
話ですが、実は先程、内牧、要す
るにこの阿蘇谷の観光客が停滞し
ているという話があったんですけ
れども、実は数としてはものすご
い数なんです。1200万人とい
う数は単純に計算しますと一日
に4万人ですよ。阿蘇郡は8万人
しか住んでいないのに、そこに一
日4万人上乗せがある。それで商
売がうまくいかないというのはお
かしい。だからこれをうまく使う
ために、どういう風に町を作り変
えるかということもあるんじゃない
でしょうか。

昔は自分が住んでる、自分が歩
いて行ける範囲に何でもあつて

というのが一番便利だったんですよ。
今は歩いて行ける範囲じゃない所
にあつた方がいい。土曜や日曜に
なつたら自分が普段いる所じゃな
い所に行きたい。阿蘇には何故
1200万人も来るんですか。そ
れは都市の人達が土日になつたら
阿蘇に行きたいなと思つているか
らでしょう。それを加味したまち
づくりを考えないと、面白くない
んじゃないかなと私なんかは思ひ
ますけど、どうですかね。

石本さん、農村リゾートって多
分その辺りのお話をしていらつし
やるんじゃないかと思うんですけ
れども、何かうまい作戦はありま
せんかね、そこら辺では。

石本●自然を都会の方々と共有す
るのは、お互いに必要なものがあ
るから。都会の人方は阿蘇の自然
が欲しい、私たちは都会の方々の
ノウハウが欲しいと。ここら辺を
いかにマッチさせて、農村の地域
づくりをするかということ。す
かし、ここには一つの観光地と
しての歴史があり、それだけではど
うしても除外するわけにはいかん。
やつぱりこれをメインに考えなけ
ればいけないと思います。

若井●会場の方からご意見はあり
ませんか。

会場●阿蘇町の山内と申します。
2、3お尋ねしたいことがあるん
ですけれども。多自然型居住につ
いて、私はもうこの阿蘇町だけで
は語れない時代に入ってるんじゃ
ないかと思ひます。日本がやつと
世界の一等国の仲間入りをしまし

たが、このままの状態を続けてい
けば2等国、3等国になり下がつ
てしまうという危機感から政治改
革、行政改革、経済改革の三位一
体の改革が始まりました。これか
ら5年、10年かけて成功させなけ
れば、日本は本当に2等国、3等
国になり下がつてしまいます。今
度の選挙もそういうテーマでした。
私は消費税よりもっと大事なの
はこのテーマだと思います。

町は何も大きくない方がいいとい
うわけじゃないです。私は大都市
はあんまり好きじゃありません。

100万都市とか200万都市に
行きたいとは思ひません。今後ま
すます高齢化社会になって、お年
寄りの医療、福祉、教育、公共事
業、この経済的な予算の面からも
うそういう時代に入つていてと思
ひます。だから国は行政改革を進
め、3300ある市町村を300
に再編するというのは、私も同
感です。私はこの阿蘇谷で一つ。
つまり、阿蘇町一宮町、産山、波
野で一つ。南小国町、小国町で一
つ。南阿蘇6カ町村で一つでいい。
もう今後10年以内に合併してい
んじゃないか。そしてこれを統合
して阿蘇市を作る時代に入つて
るんじゃないでしょうか。

先程、多自然居住の時代とい
うのは10万くらいを想定してと、宮
口先生がおっしゃったように、私
もその時代に入つていてと思ひま
す。そうすれば行政も経済も観光
も教育も公共事業も医療福祉も
っと充実できる。私はもう阿蘇町

だけではものは語れないと思います。

若井 ●今のご意見は、阿蘇谷アートポリスという一つのライフスタイルを実現する地域として、阿蘇谷アートポリスづくりの提起だっただけで、それについてご意見を。

宮口 ●国の役員が開けば随分喜ぶでしょうし、悪いとは全く思わないです。ただ、今日講演で申し上げたように、日本人は交流のない相手にきちんと交渉したり付き合ったりする習慣が今まで全くなかったんですね。例えば小さい集落を合併、再編成するというのは、実は昭和40年代から50年代にかけてやっただけです。みんなが納得するまで十分時間を掛けないで、建物作って「はい、引っ越しなさい」と。そうしたらみんな不自由な所に戻っちゃったんですね、そういう話がいっぱいあります。

今の話は、大きな方向として僕は素晴らしいと思うんですが、そのためにこそ、お互いが分かり合うことが必要だと思います。近所のことを本当に知らないと思うんですね。で、阿蘇町の中でも地区ごとの交流がちゃんと出来るとね、例えばある施設をあつちて建てようがこつちに建てようがめくじら立てることはないわけですよ。あつちに建てたから俺んところにも何かもってこいという議論があるようでは情けない。うまく社会的なやり取りを積み重ねていくということが、私は大事だと思います。

風に思います。

会場2 ●阿蘇町の国米です。先程、

小野寺さんがおっしゃったように、現在あるものをきちつとやっていくのが一番手取り早いと思うんですよね。私は「肥後の議論だおれ」という、「何をやるか」という話が延々と続いて、実際に「何をやるか」という話までなかなか行かない。そんな状況じゃいかなと思います。ですから、自分で出来ることは自分でやろうと思っ作ったかどうかということとはみんなやれば簡単にできるんですよ。先程の花いっぱい運動もやり始めたやり続けないうね。あれは10年も前に旅館組合などが沿道に花を植えたんだけど、誰も後を育てないんですね。3、4年するとだんだん枯れてしまつてという状況になつていく。そういう事を継続していくことによって、町全体がすごく雰囲気がいい環境が出来上がつてくるんじゃないかと、日頃から思っているわけです。

若井 ●阿蘇という世界にも希な大きなスケールを持った場所に私たちはいるわけですが、スケールが大きいがゆえに、どうも手をこまねいてしまつていくという現状があります。たまたま、このくまもとアートポリスも8年目。私個人の意見ですが、もうハードの時代は終わった。これからはソフトの時代であると思えて仕方ありません。阿蘇も同じではないでしょうか。この大きな阿蘇という器の時代は

終わったのかもしれないね。一人一人が自分たちの足元を見つめて、そこから資源を発見して個性化していく。その方法は多種多様だと思います。そしてそういう人々のネットワークが出来上がった時、また、住む人にとっても訪れる人にとっても、今までとは違った新しい魅力を持った阿蘇が生まれてくるのではないのでしょうか。みなさんの話を伺って、そんなことを考えた次第です。本日は貴重な意見をありがとうございました。これで阿蘇まちづくりシンポジウムを終了します。



Kumamoto Artpolis'96



まちづくり体験 オリエンテーリング 大会

ORIENTEERING

SCHEDULE

時/10月26日(土) 13:00~

場所/阿蘇町周辺

コースポイント/

- 二百十日徒歩コース
阿蘇町総合センター→泉大橋→山王閣→
田子山→明行寺→大津酒造→右馬允さん
- サイクリング史跡・公園コース
阿蘇町総合センター→山王閣→参勤交代道→
産さん神社→的石→お茶屋跡→
観光農園(黒川千丁)→成川農村公園



阿蘇町をグルリ、ひとめぐり 自分の目と足で、魅力を実感

風の冷たさに冬の訪れを思わせる10月26日(土)、阿蘇町内にある史跡や名所、自然の風景などをじっくり見てもらおうと「まちづくり体験オリエンテーリング」が実施された。コースは、徒歩コースとサイクリングコースの2コース。町内外から集まった参加者は、クイズ用紙を持って、それぞれに決められたポイントを回った。ゴール後、タイムが良かった上位3人に商品が渡され、参加者全員を対象にしたお楽しみ抽選会も行われた。

町の歴史的財産をもっとアピールしよう

熊本県の北東部に位置し、北部に北外輪山をひかえ、南に阿蘇五岳を見渡せる阿蘇町は、一の宮町と合わせて阿蘇谷と呼ばれている。

黒川が真中を流れる町内には、温泉旅館やホテル、共同浴場などが全部合わせて30軒以上あり、内牧温泉と総称される阿蘇谷の一大温

泉地となっている。明治の文豪、夏目漱石が訪れ、宿泊したことでも有名だ。

その阿蘇町で、意外と地元の人も気がついていない名所や史跡にスポットを当て、多くの人に見て回ってもらいたいと、今回のオリエンテーリングは企画された。



この道は夏目漱石も歩いた道!?

コースは、農村環境改善センターを出発して町内の要所を一回りして戻ってくる2コース。一つは文豪・夏目漱石の作品「二百十日」にちなんだ場所を歩いて回る約7kmの「二百十日徒歩コース」。そして、もう一つは自転車で阿蘇町内の史跡や公園を見て回る約21kmの「サイクリング史跡・公園コース」。

今回のオリエンテーリングは、スタート前にクイズの解答用紙が配られ、それぞれのコースの各チェックポイントで出されるクイズを解いて回るという形式。参加者は登録され、それぞれにゼッケンが渡された。

午後1時すぎ、先に出発したサイクリング組に続いて徒歩組がスタート。参加者はそれぞれクイズ用紙を手に歩き始めた。

まずは、農村環境改善センターを出てすぐの道に掛かっている第一ポイントの泉大橋へ。参加者はほとんど同じくらいに到着。この橋は、実は平成3年に完成したばかり。夕方6時になると、ライトアップされ、放水が見られるという新名所だ。

橋を渡ると、しばらく黒川沿いを歩き、山王閣まで。夏目漱石が

泊まったことで有名なこの宿は、当時は、養神館という名前だったとか。

父親が大分県に単身赴任をして、泊まったこと、有名なこの宿は、当時は、養神館という名前だったとか。

泊まったこと、有名なこの宿は、当時は、養神館という名前だったとか。

「頂上からの眺望がよいわりに



は意外と知られていないので、今回のコースに入れました」と企画スタッフ。その言葉通り、頂上からは内牧が一望のもと。スタート地点の農業環境改善センターも眼下に見下ろせた。ここで参加者にウーロン茶やジュースが配られ、ホッと一息つく人も。

クイズを解いたら、折り返し。一番手に行く小学生のグループは、疲れを感じさせない快調なスピー

ドで、足取りの重い登りの参加者とすれ違って山を下っていった。山を下りたら今度は菅原神社へ。ここの祭神は、学問の神様の菅原道真。クイズの問題になっている「相殿は誰？」という問いに答えるため、次々に訪れる参加者たちは、神社内の掲示板を見ては解答用紙に書き込んでいた。また、せっかく来たからと、御参りをしていく人も多かった。

徒歩コースの後半、町の歴史を垣間見る

続いて向かったのが明行寺。こは、夏目漱石の作品「二百十日」の冒頭に出てくる「銀杏の木が門前にあるお寺」のモデルにもなった寺。夏目漱石もよく訪れていたとか。姿形は変わったが、今でも樹齢400年以上といわれる銀杏の木は健在。残念ながら、この日、銀杏は色づいてはいなかったが、現在の住職で18代目になる歴史あるお寺とあって、荘厳な雰囲気を感じさせていた。

その次のチェックポイントは、大正2年に創設された大津酒造。この酒屋は、現在「神乃杉」という地酒の製造を行っている町内唯一の造り酒屋だ。「神乃杉」とい

う酒は、やや濃い飲み口。当日は、大人の参加者にもっとおいしさを知ってもらおうと、地酒がふるまわれた。

そしていよいよ町中を抜けたら、最後のポイント、右馬允さんへ。右馬允さんとは、戦国時代に加藤清正の家臣であった加藤右馬允という人の愛称。加藤右馬允は、農民にも人気があり、慕われていたお殿様だった。現在、右馬允さんというときは、その殿様が暮らした城跡の場所を指す。戦国期に作られた平城跡地だが、城跡は何も残されておらず、町指定の記念物に指定されている杉と加藤右馬允の墓があるのみ。





地元のだご汁で、元氣復活

すべてのポイントを通過して、スタート地点でもある農村環境改善センター広場の北西のゴールに次々に帰ってくる参加者たち。予定は4時だったが、かなり予定よりも早いゴールとなった。ゴールした人は記録証をもらい、参加賞のだご汁を食べに行ったり、おしやべりをしたり。だご汁は、阿蘇町農産物加工部会がその場で作っているため、温かく、合わせ味噌を使用したサラッとした口ざわり。材料は、野菜がメインで、すべて地元のもの。ニンジン、ゴボウ、だんごなどのほかに、芋の茎を干して作ったいもがらぶしが入っているところに阿蘇らしきが入っていた。

4時30分ごろ、タイムの良かった上位3位の人々の表彰式。サイクリングコースの優勝は1時間14秒のタイムでゴールした小学生の松本康平くん、徒歩コースの優勝者は1時間46秒の日田雄一郎くんと和田しようたくんの2人組。サイクリング組は参加者全員あまりタイムに開きはなかったが、徒歩組は、田子山への登山が原因か、一位とラストでは、約1時間半近くも差があり、リタイアする人もいた。



地元の品を賞品に、抽選会

表彰式の後には、全員参加の抽選会。抽選役は、阿蘇まちづくり実行委員会の佐藤敏満さんが務めた。町内の協賛各社から提供された景品の種類は、お菓子、漬物、米、内牧温泉入浴券、旅館ペア宿泊券などさまざま。マイクで景品の紹介があった後、その個数分だけ抽選があり、当たった人は順番に受け取りに行き、また次の賞品の説明があり、抽選というふうに進む。喜んだり、大笑いしたり、次々に賞品を受け取る参加者たち。最後まで当たらなかった人には、役場のテレホンカードが渡された。そして、いよいよ最後に、もう一度全員を対象にマウンテンバイクの抽選。「何番を引いてね」「何番何番」と自分の番号を口々に叫ぶ子どもたち。緊張するなか、自分の番号が呼ばれたのは小学生の檜林こうきくんだった。ステージ上で賞品のマウンテンバイクが渡される頃は、辺りはすっかり薄暗くなっていた。

今回のオリエンテーリングには町内の歩こう会の人たちも25名ほど参加。90歳の歩こう会の会長さんも参加し、元気に7kmを歩きた。同じ歩こう会の人、

日5kmくらい歩いているから、7kmくらいなんてことはないですよ」と語った。また、今回のオリエンテーリング

の参加者は、町内の人がほとんど。

中でも、趣味で田子山の自然観察を毎週行っているという女性は、

「今回のコースには入っていないかったけれど史跡がほくろい見られる参勤交代の道もなかなかいいんですよ。今度こんなイベントがある時は、ぜひコースに入れてほしい」と感想を述べた。

みんなでワイワイと話しながら、または周りの風景を楽しみながら、車ではなく、自分の足を使って、自分の町を見て回る。すると、普段何気なく見過ごしているものがフツと見えたりする。楽しみながら、無理しない範囲で、「もつとこんなふうになちを住みやすくしていこう」と一人ひとりがまちづくりについて提案する姿勢をもつことが、本当のまちづくりにつながる。いくのかもしれない。



Kumamoto Aripolis 90



阿蘇まちづくり展

環境と アートポリス展

ENVIRONMENT
AND
ARTPOLIS
EXHIBITION

SCHEDULE

時/10月21日(月)~27日(日)
8:30~17:00
藤野町農村環境改善センター

時／10月21日（月）～22日（火）
8：30～17：00
場所／阿蘇町農村環境改善センター
地域住宅写真

- 阿蘇の景観・地域住宅写真
- 町内小学生の風景画
- 地域づくりの模型提案
- パソコン体験

ほか



阿蘇町の恵まれた環境を再確認

よりよいまちづくりについて

みんなで提案しよう

10月21日(月)～27日(日)まで、阿蘇町農村環境改善センター内に、阿蘇の自然環境と景観の素晴らしさを再確認し、環境保全と地域づくりを考えてもらうことを目的に、各種の展示コーナーで構成された「環境とアートボリス展―阿・蘇・美において―」が開催された。写真、コンピュータ、絵、コンペ応募作品など、バラエティにとんだ展示物が並び、訪れた人々は、いろいろな側面から、阿蘇町をとらえなおしていた。

写真や絵やコンピュータで 阿蘇の良さを再発見



今回の展示の目的は、阿蘇の自然環境と景観の素晴らしさを再確認と、今後の阿蘇の環境保全と地域づくりについて考えること。

会場の入り口付近には、阿蘇在住の写真愛好家を中心に集まった写真会による阿蘇ならではのワンシーンを切り取った29枚の写真が展示された。阿蘇の景観や地域住宅などのカラフルな写真は人々の目を楽しませていた。コンピュータの体験コーナーには、2台のコンピュータを設置。誰でも自由に



触って阿蘇の情報が引き出せるよう、中には阿蘇町周辺の観光名所の場所を示した地図や説明文、写真などが入力されていた。より楽しんでもらえるようゲームなどでもできるようにっており、親子連れや小学生などが画面に向かい、おしゃべりしながら交替でコンピュータを操作する姿が見られた。

また、町内の碧水小学校の3、6年生の生徒が「私が住みたい町・家」を絵で提案。展示された32点の作品には、自然に満ちた子ども

らしいメルヘンにあふれる家や、近代的で都会的な阿蘇を描いた町など、未来に対するたくさんの夢が描かれていた。

ほかにも、農事研修室では、10月18日（金）に最終公開審査を終えた「農村公園アートプロジェクトコンペ」の最優秀賞及び優秀賞の作品をはじめとするすべての作品が並んだ。そして同室にて、熊本県内のアートポリス作品とその施工方法などのパネル展示も行われた。

町民も参加したHOPE計画

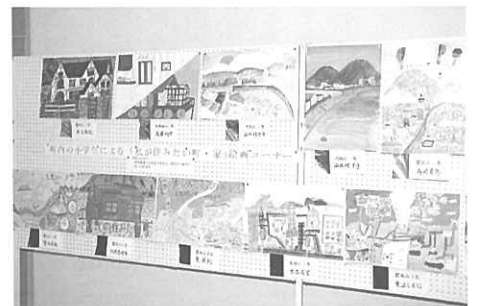
写真で見るまちづくりの軌跡

阿蘇町は、建設省が昭和58年から実施しているHOPE計画の平成4年度の指定対象地域。HOPE計画とは、戦後の画一的な住宅政策を改め、地域の気候や歴史、文化に応じた住宅のあり方を大切にして、本当に豊かな住空間を創造していくという文化運動のこと。HOPEという言葉は、地域住宅計画（Housing with Proper Environment）の略であり、あわせて「希望」の意味を表わしている。

阿蘇町のHOPE計画は、狩尾・黒川・内牧・永水・山田の5地域に関して進められている。現在すでに町営の狩尾団地は完成しており、阿蘇駅から西巖殿寺に至る行者通り・仲小路の整備もスタートした。

町民の声を生かそうと、町長、役場の若手職員、建築士会、モデル事業関係者などのメンバーに加えて、役場の公募により集められた一般町民も、会議をはじめ、講演会、勉強会、町内視察、設計コ

ンクール、ワークショップなどの多彩な活動に参加。そのまちづくりの取り組みを町内外に知らせる広報紙も6号まで発行されている。今回、「環境とアートポリス展」では、視察や勉強会の様子、狩尾団地ができる過程などを、「もやいのふるさとの出来るまで」と題して、約100枚の写真で見せるHOPE計画紹介コーナーで紹介した。



2カ月もの時間をかけて、 理想の町を模型で表現しました



また、会場ロビーには、専門家による地域づくりの模型による提案も行われた。一つは、熊本県建築士会・阿蘇支部の約10名が、約2カ月間、週3回ほど集まって作りあげた黒川地区活性化構想案の阿蘇駅周辺再開発計画模型。タテ1・2mヨコ2・1mほどの500分の1の模型では、阿蘇駅近辺に庁舎、バスセンター、ショッピングモール、カルチャーセンター、医療センターといった生活の基盤を、便利な駅周辺に配するというアイデアが盛り込まれた。阿蘇駅付近一帯を活性化し、若い人が市街地へ出ていなくても暮らしやすいまちづくりというコンセプトが基になっている。

熊本県建築士会・阿蘇支部長である佐藤敏満さんは、「H O P E計画で、住民の心に芽生えたまちづくりへの意識の高まりを持続させ、若い人たちの意見を取り入れたまちづくりをしていきたい」と語る。

もう一つは、商工会青年部による未来の内牧地区構想模型作品。テーマは「自然と人間の共生、自

然回帰を」。黒川をシンボルゾーンに、内牧地域を、観光客のための広域集客エリアと、地域住民のための地域交流施設エリアで形成。自然環境を上手に取り入れたまちづくりを提案した。商業の活性化を図るため、中心道路沿いに観光・イベントと商業ゾーンを集中させている。サイズは500分の1で、タテ1・8mヨコ2・7m。建築士会の指導のもとに、同じ場所で作成し、どちらも、展示前の10日間は夜の12時すぎまでかかって仕上げたという。模型は住宅の一戸一戸まで手作り。それぞれかなり具体的な提案となっており、訪れた町会議員たちが、2つの模型を前に、賛成意見と反対意見を述べ、気付いた点などを語り合う姿が印象的だった。

今回のこの一連の展示は、決して一過性のものではなく、これまでのまちづくりの流れにつながるものであり、今後のまちづくりを考える上で、それぞれの立場から提案を投げかけたイベントとなった。

Kumamoto Artpolis'96



阿蘇町農村公園 アート・ プロジェクト・ コンペティション

ART
PROJECT
COMPETITION

SCHEDULE

- ◇募集受付期間/
9月2日(月)～10月4日(金)
- ◇応募数/167点
- ◇審査:公開審査/10月18日(金)
- 会場/阿蘇町立体育館



阿蘇の自然とアート の融合を目指して、 農村公園に描く 壮大なプロジェクト

阿蘇町内の北塚、本塚、灰塚にほど近い場所で現在整備が進められている、農村公園を舞台にアート・プロジェクト・コンペティションが実施された。これは、“くまもとアートポリス”プロジェクトの参加事業で、これまでの建造物とは異なる視点で、全国規模にアートプロジェクトの提案を求めたもの。結果、全国からプロとアマチュア合わせて167点の応募があり、10月18日に阿蘇町立体育館で、くまもとアートポリス・コミッショナーの磯崎新さんを招いて、公開審査が行われた。最優秀賞は、東京在住の建築士の堀正人さんの作品に決定。表彰式は阿蘇まちづくり展の最終日に行われた。平成10年4月のオープンを目指して、これから協議が進められる。



ARATA ISOZAKI

スポーツ施設ともマッチする、アートのアイデアを全国募集



集落の環境整備やスポーツの基地づくり、観光農園・観光牧場などの観光型農場の展開、自然環境や地域の特性を生かした滞在型農村リゾート地づくりなど、『農村リゾート構想』を基本方針に、ふるさとづくりが進む阿蘇町。その阿蘇町で、くまもとアートポリス参加事業である『阿蘇町農村公園アート・プロジェクト・コンペティション』が行われた。

農村公園は、現在阿蘇町大字黒川に建設中で、平成10年4月のオープンを目指し工事が進められている。完成後は、敷地面積21haのスペースに陸上競技場や弓道場、テニスコート、イベント広場など、スポーツ施設が揃う。このプロジェクトは、この公園内の東部約4700㎡の三角形のスペースを、アート作品に仕上げようというものの。

アート作品の提案形式は自由だが、工事費の予算はすべて含めて5000万円以内。設計するにあたっては、阿蘇の気候・風土などの地域特性、耐久性やメンテナンスのしやすさ、お年寄りや身障者に対して配慮することなどが条件としてあげられた。プロ・アマ・国籍を問わず、建築の専門雑誌などを利用し、全国的に募集した。



世界の建築家・磯崎新さんが公開審査！



磯崎さんを迎えての公開審査は、18日（金）、町立体育館で行われた。作品の応募総数は全部で167点。カラーのもの、モノクロのもの、イラストのもの、文字のみのもの、写真が添付されたものなど表現方法は千差万別だった。

公開審査の前にまず一次審査。磯崎さんにより、会場に張り出されたすべての応募作品の中から15点の作品が選出された。地



元の代表のコーディネーターとして、熊本大学講師の桂英昭さんも同席したが、一次審査はかなり難行。午後2時の開始予定時間を30分ほどオーバーしたため、公開審査を見学しようと集まった学生や建築関係者など、開場を待つ人々の期待と緊張をおおった。

開場の際には、一次通過作品が前に張り出されていると告知があったため、入り口で自分たちの作品が選ばれているのを見て、「よし、やった！」と喜ぶ人の姿も見られた。

公開審査のはじまりに当たっては、「類似したアイデアの代表を一つずつ選出した」と一次審査の基準が述べられた。そして、一次審査を通過した15作品の一つ一つについて、磯崎さんの口から、良かった点について説明。あるものは、面白い形の一種のシンボルとなるオブジェだったり、またあるものは、中を通り抜けられるヒールリング・チューブの役割を担ったものだったり、霧の発生装置的なものだったり、と阿蘇の文化を利用したものや一つの場を形作ったもの、時間の流れを取り込んだものなど、アプローチもそれぞれ。

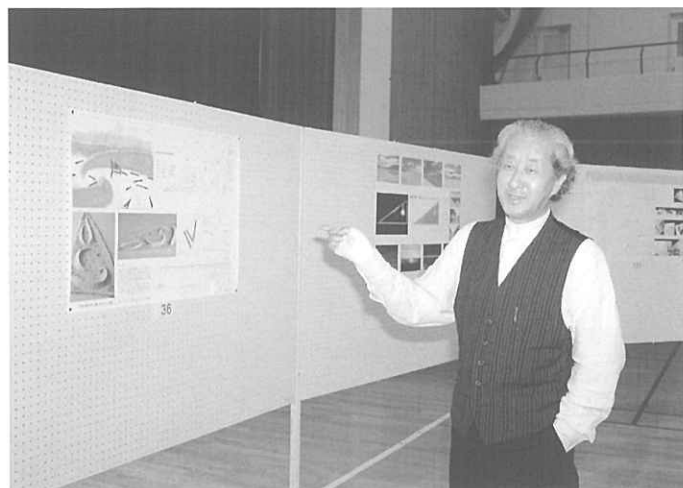
磯崎さんの解説は約30分続いた。その後、さらに、スタッフが手

伝って、作品を見やすいようにグループ分けしたり、取りはずしたりして、約半数にしぼり、最終的に最優秀賞1点、優秀賞3点、佳作6点が選ばれた。

最優秀賞に輝いたのは、東京の建築家の堀正人さんの作品。「炭化した木材を利用することで存在感を出し、阿蘇の環境をうまく生かしてあって、今回のテーマにマッチしていた」と磯崎さん。アイデアに頼る作品が多いなか、詩的に表現していた点が高く評価されて、受賞となった。また、受賞後には実際に製作されるため、例えば金額に合わせて、公園内に配置する炭化した木の数を減らせるなど、作業上に融通がつく点も大きなポイントとなった。

磯崎さんは総評として、「ある時期は、攻撃的なものを創る、攻撃することの意味があったが、今の時代にはその意味は薄れてきている。要は、コンセプトの強さだと思う。そして、その次に、生っぽく表現されているか、洗練されているかが問題。洗練されているとハートに訴えてくる」と語った。

そして、「最近行われたコンペの中では、はるかにレベルが高い作品が多かった」と印象を述べた。



◆受賞

最優秀賞／堀正人《堀アーキテクト》

優秀賞／Kデザイン研究室メンバー

《熊本大学工学部環境システム工学科》

江頭慎ほか《AA. School Dip 11 Unit Master
グループ「はしご」代表庄野健太郎ほか6名

《武蔵工業大学大学院鈴木研究室》

佳作／星田逸郎ほか《(株)現代計画研究所》

北村亜砂ほか《Estudi Saut Medir De u》

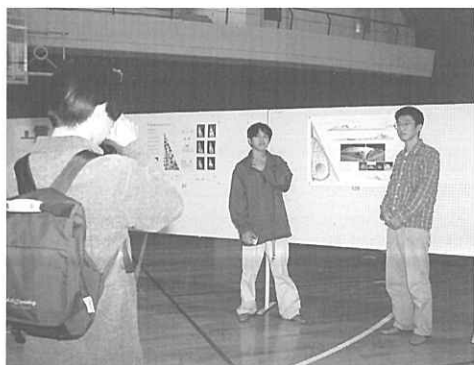
金子泰洋ほか《AK+BB》

戸田潤也ほか《戸田潤也建築設計工房》

藤江和子ほか《藤江和子アトリエ ほか》

中尾寛

公開審査後は、入賞作品を自由に観覧



ワークしかない』と決め、約1カ月でアイデアをつめ、模型を作った。図面にかかった時間は1週間。優秀賞だったけど感激した」と語った。

同じく作品を応募したもの的一次審査を通過しなかった大学生のグループは「コンセプトが複雑すぎて、ちょっと攻撃的すぎた。もともとみんなで意見を出し合いながら、総合的に進めれば良かった。落とされたけど、またこんなコンペがあったら参加したい」と前向きに意欲を燃やしていた。

また磯崎氏の生の声を聞こうと訪れた建築関係者は、「妥当なものを選ばれたと思う。コンセプトの傾向が似ているものの中からパツと選ぶ、という選出方法は面白かった。今回は磯崎さんの一人審査だったが、審査員が何人かいてディスカッションしながら決めていくというのを見たい」と感想を語った。

表彰式は、10月27日(日)、農村環境改善センターを会場に行われた「まちづくりシンポジウム」の冒頭に催され、最優秀賞と優秀賞の受賞者に賞状と副賞が授与された。

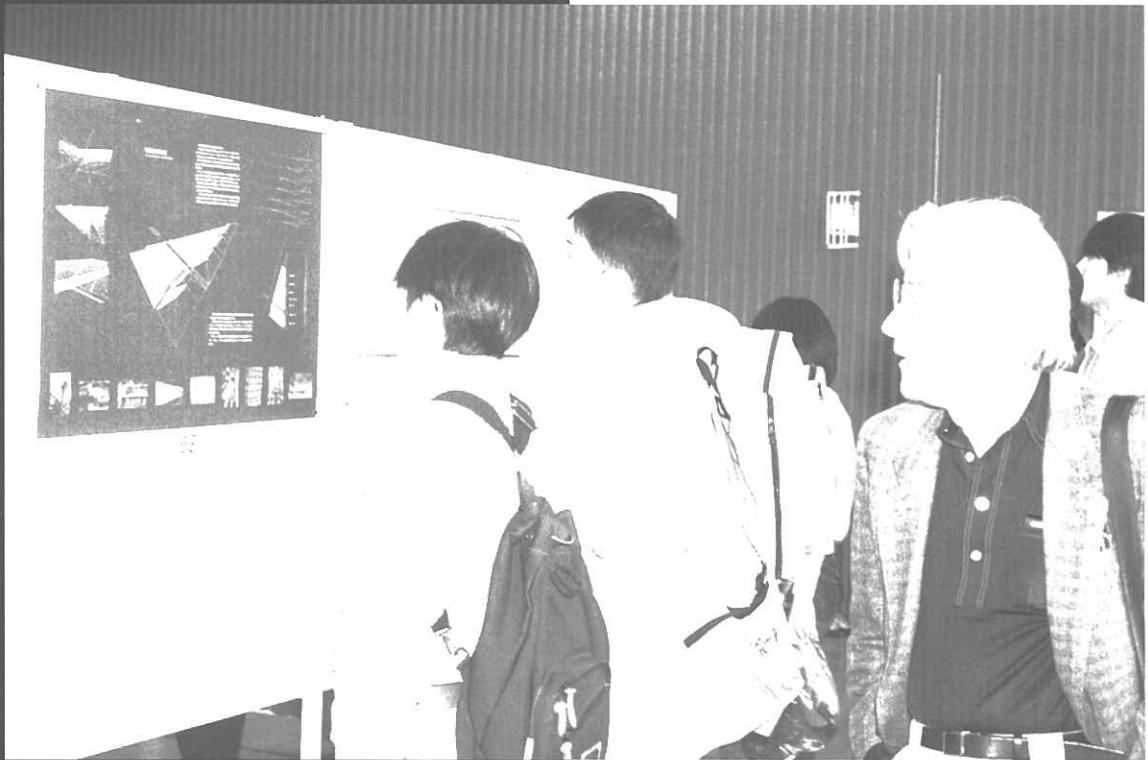
最優秀賞を受賞した堀氏は実は、

作品を仕上げるにあたって一度も来熊しなかったという。しかし、資料で、熊本の歴史や文化、阿蘇の地形などを勉強し、作品に反映した。「スペースが広大なわりにはコストが限られていた点で苦労した。炭化した丸太は、有史以前の記憶、阿蘇という土地の記憶、人々の記憶を表わしている。ぜひ、寝そべったり、椅子にしたり丸太渡りをしたり自由に使ってほしい。くまもとアートポリスは、建築家の中では話題になっていて、自分も以前から知っていた。外の人間が実際作るときに、どれだけ地元に関われるかが大切だと思う。建築家にとっては、いいイベントではないか」と話していた。

「アート・プロジェクト・コンペティション」としては受賞式をもって終了したが、実際には、平成10年のオープンを目指して、地元のまちづくりの関係者と設計者の堀さんとの間で話し合いが進められ、工事に着手する。「設計者が地元の人ではないので、いかにコミュニケーションをとって進めていくか検討しなくては」と、関係者は、完成にむけての意欲を新たにしていた。

審査終了後、会場はそのまま開放され、見学者たちは最優秀作品をはじめ、会場内の展示作品を自由に見て回った。公開審査にも訪れた熊本大学の大学院生と大学生が組んだグループは、コンペにもよく応募する常連で、優秀賞を受賞。「一次審査に残れたらいいところまでいくかな、とは思っていた。実際に現地に行ってみて、あまりの現地のスケールに圧倒され、『これはオブジェではなくアース





くもとアートポリス'96

阿蘇まちづくり展

KUMAMOTO ARTPOLIS'96 ASO TOWNPLANNING EXHIBITION

1997年3月発行

編集・発行 熊本国際建築展「くもとアートポリス'96」実行委員会
事務局：熊本県土木部建築課内
〒862-70 熊本市水前寺6丁目18-1 TEL 383-1111

企画・制作 株式会社熊日広告社、有限会社エアーズ
デザイン 株式会社フォリオ

印 刷 凸版印刷株式会社

- 総合記録
- 都市デザインサミット
- 熊本まちづくり展
- 山鹿まちづくり展
- 阿蘇まちづくり展
- 清和むらづくり展
- 泉むらづくり展

KUMAMOTO ARTPOLIS '96